将軍山古墳出土の安山岩製削器について

田　中　英　司

資料の概要

本資料は平成５年度に行われた将軍山古墳の確認調査により、古墳前方部内堀にあたるｄ12グリッドから出土した削器である。石質は良質で緻密な黒色の安山岩であり、素材として末広がりの外形を持つ横長剥片を用いている。打面は一部に剥離面を持つ自然面の平坦打面で、正面右から左方向へと同一方向の打撃により大形の剥片を得ている。

刃部は周辺加工により作り出されている。最も加工が施されているのは正面下縁部であり、この部分が石器機能の中枢にあたることを示している。その加工は正・背面の両面から加工がなされているが、興味深いことは片面が終了した後にもう1面を加工したのではなく、正面から背面、背面から正面へと交互に周辺加工を施していることである。その結果、刃部を下縁から見ると左右にジグザグを描く鋸歯状となる。残る加工は打面付近の両側縁の一部に、背面から正面への１方向から刃潰し状の周辺加工が加えられている。下縁部の加工からすれば小規模であり、この石器の副次的な機能部と捉えられる。

所属時期

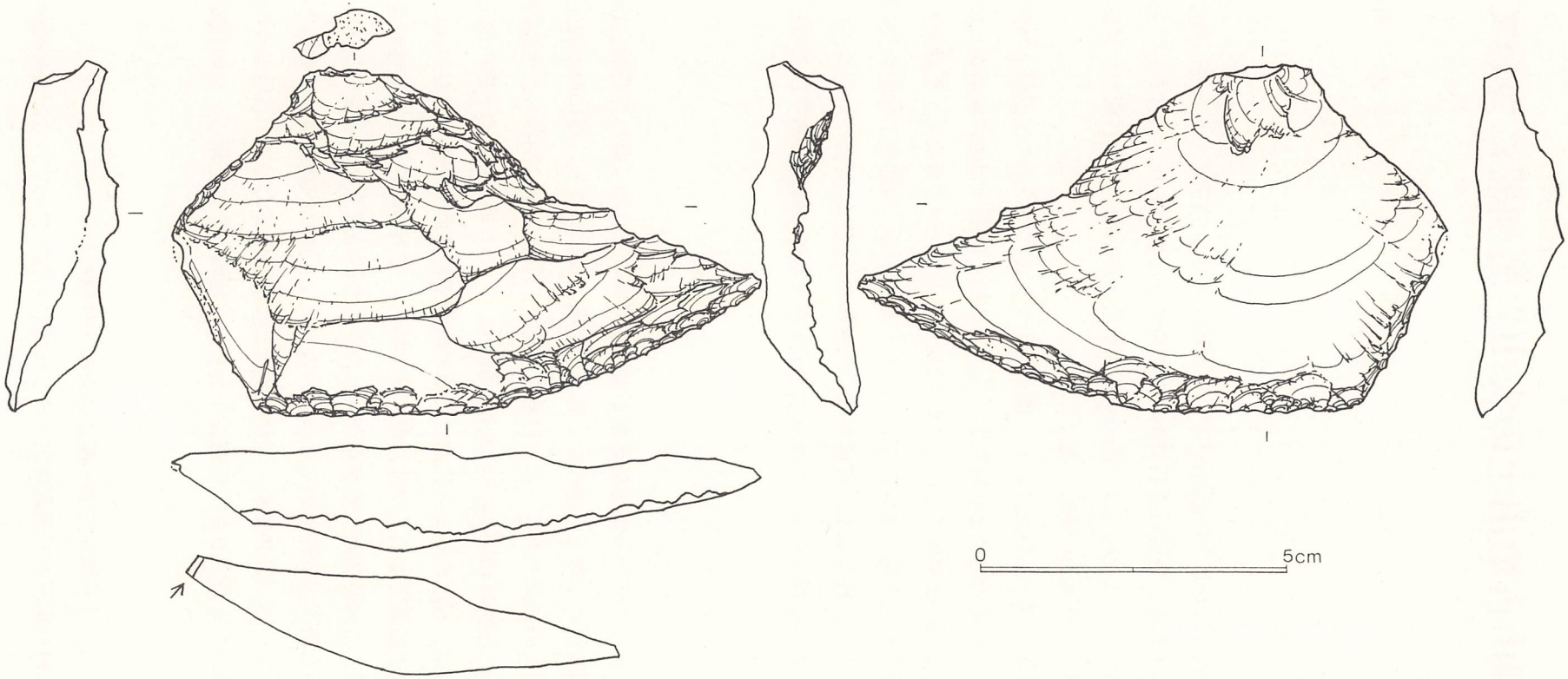
本石器が出土したグリッドからは円筒埴輪が出土しているが（埼玉県教育委員会1997）、石器の特徴からは無論古墳時代とは考えられない。将軍山古墳の地山のローム層にあった先土器時代の石器が、古墳の造営のために掘り上げられた可能性もある。安山岩製の削器も先土器時代に類例がなくはない。しかしこの石器の下縁に施された両面加工は、むしろ縄文時代の石匙の加工に似ている。打面両側縁の小加工は、石匙のつまみにあたる補助機能部の整形のためではないか。とすれば本石器は横長の粗製石匙が顕著となる、中期以前の縄文時代に位置づけられる可能性が高い。

将軍山古墳調査時に当該時期の土器が存在したのか、今回は残念ながら資料全体を再検討する余裕がなかった。しかし埼玉古墳群ののるローム台地上には、船原内郷通遺跡を始めとして多くの縄文時代遺跡が知られている（谷井1990）。今回報告した削器もまた将軍山古墳とその周囲に所在する、未知の縄文遺跡からもたらされた可能性があり、本地域の歴史を溯る一つの目安となろう。

引用文献

埼玉県教育委員会　1997『将軍山古墳－確認調査編・付編－』

谷井　彪　1990「行田市船原内郷通遺跡出土縄文後期の土器について」『調査研究報告』第３号　25－54頁



第１図　将軍山古墳出土削器